

感想

—ヒューマニズム「研究」とヒューマニズムの「精神」の遭遇—

加藤 守通

「歴史の中のヒューマニズム」は、タイトルに恥じない壮大な企画であった。古代ギリシャ・ローマにおける自由学科の変遷を明示した小林雅夫先生の研究、ビザンチンにおけるヒューマニズムの伝統の継承と醸成を掘り起こした和田廣先生の研究、ルネサンス・ヒューマニズムの意義をイタリアにとどまらない広範な視点から論じた根占一先生の研究、そして、ドイツにおける新人文主義および第三の人文主義の思想内容および社会背景について詳述した曾田長人先生の研究 — いずれも当該分野における一線級の研究者によるものであり、確固とした専門的知識に支えられた堂々たる発表であった。それ以上に刺激的であったのは、異なった時代や文化におけるヒューマニズムの受容と変容が、これらの発表の組み合わせによって輪郭を現しはじめたことである。1 + 1 + 1 + 1 は単に4ではなく、組み合わせの妙によっては6にも8にもなるということを実感できた。

たとえば、古代ギリシャ・ローマとルネサンスの間にビザンチンを置くことで、ルネサンスに対するビザンチンの影響が単なるギリシャ語やプラトニズムの伝授を越えた幅広いものであることがおのずから明らかになった。古代ヒューマニズムとルネサンス・ヒューマニズムを媒介するものとしてビザンチン・ヒューマニズムがあるということは意外に知られていないだけに、このことはとても貴重なことである。

また、そもそもヒューマニズムという概念がドイツで生まれただけに、ドイツにおけるヒューマニズムの伝統の検討は、ヒューマニズムの影響史を知るうえで是非取り上げなければならないテーマであった。

このように四つの研究を絶妙に配置することで、ヒューマニズムの伝統が持つ広がりと同様性が彷彿として現れることになった。このことはまさに、プロジェクトを企画した小林先生の慧眼によるものである。

このように大局的な視座からヒューマニズムを見据えることは、今日において逼迫の課題であると言える。ヒューマニズムの伝統は、単なる個別研究の対象に甘んじるには、あまりにも豊かな資源を有しているからである。

17世紀以降の学問は、対象を限定したうえでそれに関する情報をできるだけ網羅するという専門化の道をとってきた。この種の専門化は、学問の進歩にとって（そしてもちろんヒューマニズム「研究」にとっても）不可欠であるが、ヒューマニズムの「精神」とは相容れないものがある。キケロにしてもペトラルカにしても、特定の専門領域の中に閉塞した学問の在り方に警鐘を鳴ら

し、専門性の壁を越えたところで人と人をつなぐ働きを言葉の中に見出し、その可能性に
いかなれば自らを賭したのである。キケロの『弁論家論』に登場するクラッススは、キケロ自身
の理想を体現しているが、彼は気さくで話しやすい人物であり、会話の達人であった。特定の専
門性や文化の壁に隔てられずに、心を開いて会話を継続すること。このことは、現代におけるヒ
ューマニズムの遺産である。

特定の時代や文化を越えたヒューマニズムの伝統に関する今回のような包括的な共同研究は、
この遺産の継承にとって重要な役割を演じるものである。このような場に参加し、発表者およ
び参加者の方々と刺激的な会話を共有することができたのは、私にとって大きな喜びであった。
このような場を設けてくださった小林先生はじめ関係者の皆様に深く感謝したい。